

「笹川杯本を味わい日本を知る 作文コンクール 2022」 (日本語版)

入賞作品

目 次

★「笹川杯本を味わい日本を知る作文コンクール 2022」（日本語版）	一等賞作品
福州大学 日本語専攻 2年	林子晗 …………… 3
四川軽工業大学 日本語専攻 4年	王云樵 …………… 4
上海初盟教育科技有限公司	張佳瑜 …………… 5
北京第二外国語学院大学院 日本語学と日本語教育 研究生 1年	劉力暢 …………… 7
★「笹川杯本を味わい日本を知る作文コンクール 2022」（日本語版）	二等賞作品
上海市甘泉外国語中学 高校 2年	李一淳 …………… 9
对外經濟貿易大学 日本語通訳大学院 1年	杜宇辰 …………… 10
大連海事大学 日本語翻訳大学院 1年	褚佳伟 …………… 11
上海对外經貿大学 日本語翻訳専攻 1年	宋家興 …………… 12
越秀外国語学院 東方言語学院日本語科 4年	樓宇昂 …………… 13
安徽師範大学 日本語専攻 4年	湯言薇 …………… 15
電子科技大学 日本語専攻 3年	孫佳明 …………… 16
長安大学外国語学院 日本語専攻 3年	夏艳卿 …………… 17

「笹川杯本を味わい日本を知る作文コンクール 2022」

(日本語版)

一等賞作品

死から照らされる生への感謝 — 『おくりびと』が繋ぐ中国と日本 —

福州大学
日本語専攻 3年
林子晗

「死は生の対極としてではなく、その一部として存在している」。

これは、図書館で偶然出会った村上春樹の小説「ノルウェイの森」の一文だ。当時の私は、「死は終わり」「死ぬとすべてが意味を失う」と思っていたので、その言葉の意味がよく分からなかった。しかし、2008年の日本映画『おくりびと』を見て、生と死についての考えが変わり、村上の言葉の意味が理解できるようになった。

物語は、失業した小林が、故郷の山形県に戻る場面から始まる。そこで「旅のお手伝い」という広告を見た小林は、旅行代理店か何かと思い、さっそく面接に行ってみる。しかし実際は、旅は旅でも「あの世への旅」をお手伝いする「納棺師」の仕事だった。最初はその仕事を嫌がっていた小林だが、少しずつ納棺師という仕事に誇りをもつようになっていく。

映画のなかで、印象的だった台詞がある。「死とは一枚のドアと言えるかもしれない。逝くなるというのは終わりを意味するのではなく一種の超越かもしれない。[...] 次の世で私たちはまた再会できる」。なるほど、ご遺体を美しく、愛情を込めて扱うこと。それは、故人には「生きていた時の姿であの世へ行ける喜び」を与え、遺族には「いつかまた故人に出会えるという希望」を抱かせる行為だ。そう考えると『おくりびと』は、死を扱いながらも「生きることの掛け替えのなさ」を伝えていると思うのだ。

またこの作品は、日本人の死生観に満ちている。日本人の死に対する態度は冷静で、悼むことはあっても悲しむことはない。それは『おくりびと』の台詞にもあるように、「冷静であり正確でありそして何より優しい愛情に満ちている」。故人が、尊厳を持って死後

の旅を続けられるよう、全身を丁寧に清める納棺師の手さばき。そこには日本人の命に対する敬意が感じられる。

他方、命への敬意という点では、中国と日本には共通点もある。中国の人々は古来より、万物を愛する「仁」という儒教の教えや、森羅万象の尊重を唱える荘子の影響で、生命への畏敬の念を育んできた。そのため、『おくりびと』からひしひしと伝わる「生きることの掛け替えのなさ」は、中日両国の人々の心にきっと響くことだろう。死を想うことで生が感じられるのだ。それはまさに「死から照らされた生への感謝」である。私はここで、「死は生の一部」という村上の言葉をやっと理解した。

1972年の「中日国交正常化」以来、両国では、無差別殺人や若者の自殺などのニュースが後を絶たない。そのため私は「中日国交正常化 50 周年」を機に、『おくりびと』から学んだことを両国の人々に伝えたいと思う。それは、各々の死生観の核心にあった「生命への畏敬」を取り戻してほしいということであり、掛け替えのない人生を生きる大切さを知ってほしいということだ。そして、急速な経済発展や世界情勢のなか、こうした「命を巡る対話」が、今後の中日間を結び付ける一本の糸になることを切に願っている。

(日本映画：滝田洋二郎監督『おくりびと』)

雨にも負けず

四川軽工業大学
日本語専攻 4 年
王云樵

「雨にも負けず、風にも負けず、欲はなく、決して怒らず、いつも静かに笑っている」。宮沢賢治の手に書かれたその僅か数語に、私は絶口した。

静まり返った部屋に座り、自分の影を黒い文字の上に重ね、『雨ニモマケズ』の詞藻をしんみりと心に沁み込ませていた。何の欲望も意地もなく、ニコニコ笑ってばかりいるなぞ、ただの変人ではないか。それに、何をされても頭にこないのは臆病ものに相違ないのでは。そう思いながら、眉を顰めていた。

「あらゆることを、自分の勘定に入れずに、よく見聞きし分かり、そして忘れず」。

この数行に記憶の糸が手繰られ、ぼんやりと自分のことを思い出した。

私は自分のことをよく笑う人より、怒りやすい人だと自覚している。周りの人はそうに見えないと言うが、自分には分かる。他人の注目を浴びた時の苛立ち、自分の誤りにより

醜態を晒された時のむかつき。いずれにせよ、そう感じるたび自分で自分が嫌いになる。そうやって己の悪癖を脳内に彷徨わせ、片手で顎を支えつつ、手を止めることなく最後のページまで捲った。

「日照りの時は涙を流し、寒さの夏はおろおろ歩き、みんなにデクノボウと呼ばれ」という後半まで進んだ時、記憶の糸が何かと絡み合ったようだった。そして読み終ると、背筋をすっと伸ばし、両手で本を捲り、最初から最後まで何度も読み返した。

その糸先に結ばれたのはアドラー哲学の論点であった。さらに潜ると「全ての悩みは対人関係」という理論に辿り着いた。本来は一括りにし過ぎで最適な見解ではないと考え頭に留めていなかったが、『雨ニモマケズ』のこの詩句に合わせると色合いが一気に変わった。

「欲はなく、決して怒らず」。

所詮私の怒りも自分の欲によって生み出され、他人の視線によってもたらされた悩みに過ぎない。「らしさ」のまま生きてると自負しつつ、本当は世間に散々左右されている。そして他人の目線や論いを言い訳とし、私は思込み、まるで望んでいるかのように自分を競争という欲の檻に閉じ込め、怒りを捏造した。

目から鱗だった。そこまで読み進めてようやく詩の深みを理解した。闇夜の部屋に詩の世界から飛び出した黒い文字が輝き、私の目に焼き付いた。

たとえ「みんなにデクノボウと呼ばれ」たとしても、「あらゆることを自分の勘定に入れず、よく見聞きし分かり、そして忘れず、欲はなく、決して怒らず、いつも静かに笑っている」でいいのだ。目の前に聳え立つ困難に気付いていたのに知らないふりをし、ただ逃げずに微笑んで立ち向かう。それこそが真の勇気と強さではないか。

私たちの存在には必ず価値があり、焦る必要はない。ただ「日照りの時は涙を流し、寒さの夏はおろおろ歩き」、今、この道を真剣に生きればいいのか。強靱で忍耐強い心を持ち世間の流れから一歩引いて、匿名な傍観者でいるのも悪くないだろう。そうすれば、俄か雨に打たれて勝てぬとしても、負ける気がしない。

月明かりが窓からこぼれてきて、ふと欠伸をすると宵の月に目が行った。「褒められもせず、苦にもされず、そういうものに、私はなりたい」、私はそう口ずさみ、本を閉じた。

『雨ニモマケズ』 宮沢賢治

共に歩む

上海初盟教育科技有限公司
張佳瑜

2019年は私にとって、忘れられない年だった。というのは、2019年は私が初めて日本へ留学した年であり、多くの人生勉強になった年だからだ。初めてのことには当然新鮮さが伴う。この留学は私にとっても例外ではない新鮮なものであった。

とはいえ、はじめはわくわくでいっぱい私は新鮮さが消えていくにつれて、友達は出来たものの、少しずつ異国での孤独を感じるようになった。本好きの私は気を晴らそうと思ひ、向かった先は家近くの書店だった。そこの三階で出会ったのが伊集院静さん作のエッセイ集『きみとあるけば』だった。

最初はタイトルに惹かれ、気付けば思わず本を引き出した。表紙に堂本剛さんのかわいらしい二匹の犬のイラストがあった。それを見て内容に興味を湧いてきた私はこの本を買わずにいられなかったのだ。

「人は誰か、何かとともに歩いているものだ。その相手が、たとえ人間ではなくとも、子供の時代、青春時代、そして大人になっても、その人のかたわらには誰か、何かそばにいて、喜び、哀しみをともに抱いてくれている。孤独な人には“孤独”が隣にいる。」

家に帰ってページをめくると目の前に現れた言葉だった。なんと心に染みる言葉なのだろうと思った。

なんだ、孤独を感じる私も本当は孤独ではないのか。掃き出し窓のガラスに映る自分を見て、口元がほころんでいたことに気付いた。

この本をめくりながら日本人の心の繊細さを覚えた。日本の古典文学である『枕草子』からみてもわかるように、日本人の心には古くから繊細さが流れている。伊集院静さんの文章からまさにその繊細さが感じ取れる。素直に自分の弱さや非を認めて反省する姿勢が、むしろ逆に優しさと強さの表れだと思える。私は自身の内面と向き合うのが怖かった。自分の弱さを認めたくないからだと思う。しかしこの本を読み終え、私はやっとわかったような気がした。臆病でもいい、悲しんでもいい、喜怒哀楽はより人間性を豊かにするために極めて重要な感情だと考えた。

最近夜になるといつも雨が降る。この雨音で来日間もない頃の留学生歓迎会を思い出してしまう。その日は会場へ行く途中突然の雨に降られ、髪と服が濡れてしまい、落ち込んでいたのが記憶に残っている。歓迎会のテーマは「袖振り合うも他生の縁」。そこで五か国の学生と先生が集まり、みんなでゲームをしたり友達を作ったりしているうちに、気分も晴れてきた。その時の楽しさは今でも鮮明に覚えている。

それにもかかわらず、帰国して2年近くも経つ今となっては、その時の仲間たちとの連絡がいつの間にかなくなっていた。寂しい気持ちにはなるが、それでもいい。彼らはその時の私と歩いてくれていたから、この出会いは私の心に咲いた永遠に枯れない思い出の花になっているのだ。そして今日もきっと誰かが、何かとめぐりあい、私と歩いてくれるはずだと、私は信じている。

小川糸「ツバキ文具店」
—依頼者の心を伝える代書屋—

北京第二外国語学院大学院
日本語学と日本語教育 研究生1年
劉力暢

「代書屋の仕事は影武者。決して日の目は見ないけれど、誰かの幸せのために必要な商売なんだよ。」雨宮鳩子は、鎌倉にある文房具店の若店主である。幼い頃から祖母に厳しく習字の稽古を命じられ、同級生と遊ぶ時間がなかった鳩子。鳩子は祖母と大喧嘩して家を出る。しかし、祖母の死をきっかけに、鳩子は八年ぶりにツバキ文具店に戻り、代書屋の仕事を経営することになる。

鳩子は手紙を書く前に、真剣に依頼人の話に耳を傾ける。状況をひとつひとつ丁寧に調べて、依頼人の気持ちを理解しようとする。そして、依頼人の気持ちに合わせて、手紙を書く時の文房具、封筒、便箋、字を書く道具、字の書き方、濃淡まで、丁寧に選んでいく。そうすることで依頼人が書いた以上に、依頼人の気持ちを伝えられる手紙が完成するのだ。

「この淡い思いを誰かに伝えることができれば、私は嬉しくてたまらない。」これは鳩子の言葉である。手紙を代書するたびに、依頼者の人生が見えてくる。手紙を書いているうちに、複雑な感情を感じとることができる。そして、その気持ちを相手に伝えて、幸せにできる。鳩子は他人の役を演じる女優のようだ。なんと素晴らしいのだろう。人の気持ちはさまざま、代書屋という仕事はいつまでも退屈しない。そして、手紙を書くことで鳩子は、たくさんの人の人生に関わり、人との絆を築くことができた。バーバラ夫人、パンティさん、男爵……いつしか鳩子の周りには多くの友人ができ、愛と温もりを与えてくれた。たくさんの人の代書をする中で、鳩子は昔、祖母から教わった言葉の意味を理解できるようになった。祖母の言葉は代書の仕事に役立っただけではない。人の複雑な気持ちを理解し、周りの人々に感謝と心遣いができるようになった。成長した鳩子は、大喧嘩した祖母の気持ちも理解できるようになり、祖母を許し、愛することができた。

「どう中国語に翻訳したらいいだろう。」翻訳をする時、私はいつも悩んでいる。そんな時、鳩子のことを思い出す。代書屋と同じように、通訳の仕事も人の気持ちを文章で伝えることだ。同じ言葉でも、その時の状況や気持ちの変化によって、違った意味が出てく

る。意味を正確に翻訳しても、訳文が固くなってしまい、原文の柔らかさを失うこともある。人間の感情を理解することができない翻訳ソフト。それに比べて、私たち人間の翻訳者は、鳩子のように書いている人の感情をしっかり理解し、それをきちんと伝えるために努力と工夫をすることができる。私は鳩子のまじめな姿勢と、気持ちを真剣に伝えようとする姿に感動した。それは、翻訳者にとっても必要なことだと思う。「人であれ、国であれ、お互いが理解して初めて友好が実現できるのです。」私は鳩子のように書かれた人たちの気持ちをきちんと理解して、しっかりと伝えられる通訳者になりたい。そして、将来、中日友好のために自分の力を捧げたいと思う。鳩子は平和の鳩である。

小川糸「ツバキ文具店」

「笹川杯本を味わい日本を知る作文コンクール 2020」

(日本語版)

二等賞作品

映画の力、愛の力

上海市甘泉外国語中学

高校2年

李一淳

私の一番好きな日本の映画は『ビリギャル』だ。なぜなら、この映画には「言っているうちに、願いは向こうから近づいてくる。」というセリフがあり、そのセリフに力と愛を感じたからだ。

この映画の主人公は女子高生のさやかだ。中学生時代の彼女は思春期にあたり、反抗的な態度が強くでぜんぜん勉強しなかった。しかし、塾の坪田先生の指導と母親の支えで、頑張っ勉強しようと決心し、ようやく希望の大学へ進学できた。とても感動的で、暖かさ心強さを与えてくれる物語だ。

さやかの母親は偉いと思う。毎日遊んでばかりいて、いつもぶりだったさやかのことで何度も学校に呼び出された母親は、さやかを叱るどころか、「さやかといろいろ話ができて、楽しいです。」と言っていた。また、母親はさやかの授業料を稼ぐために、毎日毎晩苦勞して働いたが、文句一つもなく、いつも笑顔でさやかに向かっていた。このシーンを見るたびに、涙を禁じえない。いつまでも子どものそばにいて、支えてくれるというのは最高の母性愛ではないかと感心した。子供には安心感と信頼感を感じさせ、いい励ました。

さやかの母親のほかに、塾の坪田先生にも印象深い。坪田先生はとても思いやりのある人で、いつも生徒の声に耳を傾け、熱心にアドバイスをする。勉強大嫌いなさやかに対しても差別なく「さやかは本当にいい子ですね。」と励ました。坪田先生のおかげで、さやかは人生の目標を持ち始め、恥や失敗を恐れずに夢に挑むことができた。そんなに立派な先生に出会ったさやかはラッキーだったと思う。

母親と坪田先生の支えと励ましで、ビリだったさやかは諦めずにベストを尽くし、最後に慶応義塾大学に合格した。大学の合格通知書を受け取った瞬間、さやかは美しい笑顔を

見せた。この笑顔はつい自分の中学生のころのことを思い出させた。

中学校に入ったばかりの頃、私もさやかのように勉強を怠っていた。ある日、先生のお勧めで、『ビリギャル』を見た。その後、私は大きなショックを受け、別人のように変わった。もともと遊んでばかりいた私は真面目に勉強するようになった。なぜかという、この映画を見て、自分の両親と先生もいろいろしてくれたことに気づいた。

両親は塾の送り迎え、夜食作りなど、生活のあらゆる面で世話をしてくれている。これこそ親の愛というものだね。

両親だけでなく、学校の先生も私のためにいろいろ考えている。小さな進歩でも、クラス全員の前ではめてくれたので、自信がついてきた。不思議なことに、励まされれば励まされるほど勉強がよくできた。このように、私は勉強の楽しさを次第に味わえるようになった。彼らも温かさや支えを与えてくれた。

「言っているうちに、願いは向こうから近づいてくる。」このセリフに深い感銘を覚えている。やろうと思えばできる。両親も先生もそばにいるから、夢を追う自信がついてきた。これこそ映画の力だ。これこそ愛の力だ。

『ビリギャル』

米には神

対外経済貿易大学
日本語通訳大学院1年
杜宇辰

「この飯、疎かには食わんぞ。」と言って、侍が命も落とし得る仕事を引き受けました。報酬はただの毎日の白い米の飯です。

黒沢明監督が制作したこの映画『七人の侍』には、このようなプロットがあります。初めて見た時は、びっくりしました。農民たちは村を守り、食糧を保護するために、侍を雇用し盗賊と戦うというストーリーです。盗賊たちは人数が多いほか、装備も整っています。それに対し、侍はただ七人だけです。仕事が危ない割に、給料は飯だけで、映画のなかで「農民が持っているものはこれだけです」という説明が信じられませんでした。「米はありふれたものなので、たかが飯のために命懸けて村を守る侍たちは馬鹿ではないか」と思いました。

その後ある日、大学の日本人の先生と一緒に食事をする機会がありました。食事がほとん

ど終わるころ、皿の隅にある一粒、二粒の米を先生が箸で挟んで食べていることに気づきました。おかしいと感じると、先生は「あ、日本では一粒の米には七人の神様が居るということわざがあるのよね。ご飯に対して尊敬しなきゃ。」と言いました。その時突然、日本人にとって米はとても神聖なものであると分かりました。農耕文明から成長してきた国として、米は古代から日本人の主要な食糧です。米が日本人を養ってきたとも言えます。しかしそんなに重要な米は楽に獲得できることではありません。農民の着実な苦勞のほか、大体全てのことは天候によります。そのために、米は人の努力と運命の結合です。今普通に見える米は日本人の勤勉と運命と抗争の精神の代表的存在とも言えます。

『七人の侍』のなかで、米は侍への報酬としてだけでなく、農民の闘争の精神と未来への希望でもあります。農民たちは貴重な米を侍に与え、他の全てを放棄して盗賊と戦い家を守り、そのことが見る人の感動を誘います。侍たちは、その素朴な勇気に打たれ、農民を助けることに決めたのでしょう。

実は中国でも同じだと思います。子供の時、食べきれないご飯を捨てて、祖母に初めて叱られました。「食べ物を粗末にはいけない」と言われました。同じ農耕文明で、日本でも中国でも米を重視しています。それは土地からの食糧に養育された両国の人々の共通な素朴な美徳だと思います。

今、科学技術の発展によって、米は以前より珍しくなくなりました。大体の人は思う存分食べられます。しかし米を大事にしなければなりません。中国人も日本人も、昔からの勤勉と抗争の精神を忘れてはいけません。そうです。米には神が住んでいるのですから。

映画『七人の侍』

电影《七武士》

女の子はどう生きるか

大連海事大学

日本語翻訳大学院1年

褚佳伟

上野千鶴子という名を初めて聞いたのは三年前のことだ。その時、上野先生は東京大学学部入学式の祝辞を発表した。その祝辞を読んだ後、とても心に響いた。「フェミニズムは弱者が弱者のままで尊重されることを求める思想です」上野先生のフェミニズムに対する理解は本当にびっくりさせた。「弱者が弱者のままで」強くなることではなく、弱者のまま

でいい。

その後、先月のことだが、上野先生の新作『女の子はどう生きるか：教えて、上野先生！』を拝読した。再び先生の考えにたくさんの刺激を受けた。

名簿の一番はなぜ男の子？

この部分は「Q5 共学校に通っています。名簿はどうしていつも男の子が先なのか？」への答えだ。先生はまず「ほんとに不思議ですねえ」と書いている。私もそう感じた。日中共学校の名簿は並び方の差が極めて大きいと感じた。中国の共学校では名簿の一番は必ずしも男の子ではなく、また、名簿は姓のアルファベットの順に並べられる。それに対して、日本の共学校では女の子の名前が後ろに並べられる。それは初耳なのだ。ヘンだろう。男の子が先だ。それは「習慣」だか。「伝統」だか。「当たり前のこと」だか。では、いつからの「習慣」或いは「伝統」だか。また、その「当たり前のこと」の理由があげられないか。日本ではそのようなことがあって、中国では存在しないかと思えば、こんなことが出現した。PCR検査に関するニュースだ。大連全域では、常態化する中のPCR検査は原則として毎週の火木土に集中的に行われて、火曜日は男性のサンプル検査、木曜日は女性のサンプル検査だ。PCR検査の順序も男性が先という事実が現れた。政府関係者はそのように行う理由を示したが、どうして男性優先なのかについては指摘していない。

別姓で生きるということ

「夫婦同姓」は日本ではいつも話題だ。先月、参議院選挙の候補者に行ったNHKのアンケートで選択的夫婦別姓制度の導入への賛否について聞いたところ、賛成が62%、反対が29%となった。「日本の法律は『夫婦同氏』の原則を定めているだけですから、夫の姓でも妻の姓でも、どちらでもいいんです」上野先生はそう指摘している。実際の日本社会には、夫婦同姓は極めて普遍的なものだろう。法律と現実の間にはギャップが歴然と存在している。国連の持続可能な開発目標の目標5は「ジェンダーの平等を達成し、すべての女性と女児のエンパワーメントを図る」ということだ。国連はジェンダーの平等を推進するには、世界的な行動を取っている。日本の場合も多様性を認め合う社会の構築に向けてジェンダーの平等にさらに取り組むべきだろう。

「女の子はどう生きるか」この複雑な問題に対する上野先生の回答は日本の女の子だけではなく、世界の女の子にとっても有益な参考情報と言っても過言ではない。

『女の子はどう生きるか：教えて、上野先生！』

天言はずして四時行われ、地語らずして百物生ず

上海对外経貿大学
日本語翻訳専攻1年
宋家興

まだらの残陽は黄砂に染まり、簫索の枯れ枝は銀色に輝き、遠くの途切れた壁と崩れ残った垣根は死のような静寂にたたずみ、聞こえるのは黄砂と白い雪が入り混じって空でヒューヒューと鳴いているだけで、息苦しい不安と恐怖が漂っている。「また村が一つ死んだ」という低い声が響き、映画『風の谷のナウシカ』が徐々に幕が開いた。

まるで長年に伝わる予言の歌謡を聞くように、重厚で悠々とした叙事詩を味わって読むように感じられている。宮崎駿は常に神の関心事を気にかけていると言われている。『風の谷のナウシカ』は彼が思想家と予言者の姿で創作した作品で、人類の行く末を考え、人類の将来を予言し、重い憂慮を凝縮している。1984年に制作されたこの映画は、今日でも示唆に富み、警鐘を鳴らし、深く考えさせる物語である。

古代の野蛮時代から近代文明、そして映画で描かれる未来の世界まで、自然はいつまでも愛に満ちた母のように、万物を静かに育てている。しかし、この母の無私と慈愛に人類はどう応えるか。映画では、トルメキア軍司令官である皇女クシャナは傲慢の代表として、巨神兵を無理やり孵化させ、王蟲たちを死滅させようと試み、いまだに覇権と戦争、烈火によってのみ大地の主導権を取り戻すことができると固執している。このような傲慢と無知が、私たちにはあるのではないだろうか。見て、戦争の炎は古代から今まで消えることはなく、権力と欲望、征服、破壊、どれだけの命が砲火の下の怨霊になり、大国の競い合いの碁盤の上に消えてしまったか。聞いて、私は北極熊の悲鳴を聞いた。やせこけた北極熊はすでに海にどのくらい漂っているかわからなく、足元に残った氷もだんだん溶けてしまう。果たしない海に向かって叫ぶが、それに応えるのは死亡だけである。過剰な資源採掘、無節制な排気ガスにより、地球温暖化、高温電力制限、干ばつ、山火事……これは自然の怒気である。嗅いで、昔の馥郁たる花の香りは嗅げず、マスクの中の汚く息苦しい空気しか嗅げない。新型コロナウイルスが発生してから、今まで三年も猛威を振るっており、誰もがコロナの恐怖の下で生きている。このような日はいったいいつまで続くのだろうか。

「明日は良くなるのかな」と、人類の何世代もの人々が災害に直面してこの質問を發してきたのではないだろうか。しかし、この世界は人類あつてのものではなく、人類は衆生の一部であり、世界の一角に存在することを許されている。自分が創造主だと思っている人類は、ただ自然に育まれた生命に過ぎないのである。人類は自らの手で文明を葬ったが、太陽は千億年前と同じように昇り続けている。青き衣のナウシカがゆっくりと降臨し、王蟲たちの金の触手に支えられながら歩き出すとき、その質問の答えが見つけれられた

ようで、謙虚と畏敬こそが、この満身創痍の世界を癒す良薬である。

宮崎駿——『風の谷のナウシカ』

「余命10年」見た後の感想

越秀外国語学院
東方言語学院日本語科4年
楼宇昂

定番の難病恋愛映画だと思っていたが、従来の恋愛映画の枠を越えて、愛すること、生きることの意味に真摯に迫っている。心に深く染み渡り、深い余韻に浸ることができる感動作品である。

原作の小坂流加は原発性肺高血圧症という病気で38歳の若さで夭折した。医学の進歩した現在であっても、未だ治療法のない難病と闘う人が数多く存在するという事実には、悲しみを感ぜずにはいられない。

本作の主人公は、高林茉莉。彼女は、余命10年の難病に侵されても懸命に生きていたが、恋愛はしないと心に決めていた。しかし、故郷の同窓会で真部和人に出会い徐々に惹かれ合っていく。そして、二人の運命は大きく変わっていく。懸命に生きようとするが、余命10年との葛藤で苦悩する茉莉を小松菜奈が物静かで達観した演技で巧演している。坂口健太郎は、生きることに絶望した和人を生気のない佇まいと虚ろな目の表情で表現している。茉莉は「まつり」と読み、この読み方が恋人（真部和人）の再起を後押しする重要な意味を持つてくる。

退院した茉莉は、日中は普通に過ごしているが呼吸する力が弱く、就寝時は鼻から酸素を吸入している。彼女の部屋には痰の吸引機があり、自分で咳をして痰を吐き出す能力がないのか。吸引する時は自分自身で管を喉に入れて行えるのか、他人の介助が必要になるのか気になった。停電や自然災害が起きて避難所に行かねばならぬ時など、人知れぬ苦労があるだろう。

死に瀕した主人公が人生を走馬灯のように回想する場面はよくあるが、本作のそれは「未来系の走馬灯」と言うべき新ジャンルである。その中に東京スカイツリーの展望台に上がる場面があるが、姉の桔梗が高所恐怖症のため一度も行く機会がなかったのだ。でも和人と一泊旅行ができるのだから、車椅子に乗ってでも一人で行けば良かったのにと思う。生きる姿勢が全く異なる二人の愛は、生きることの喜びになっていくが、茉莉は生き

たいという生への執着が高まり厳しい現実との狭間で苦悩する。和人は、生きる喜びを知り生まれ変わっていく。本作は、苦悩を深める茉莉と再生していく和人を描くことで、人間の運命の非情さと不条理に迫っている。恋愛映画を越えた領域に達している。

本作は、日本の四季の美しさ、変化を背景に描かれる。四季の美しさは刹那的だからこそその美しさが際立つ。四季の変化は時間の経過であり、着実に時間が過ぎ去っていることを告げている。そう考えると、四季の描写は、限られた時間のなかで懸命に愛を育ててきた二人と重なり切ないが美しい。ラストはリアルで切ないが清々しい。誰の人生にも限りがあるからこそ、懸命に生きることが大切だと本作は教えているからである。

注：日本映画「余命10年」

薔薇とモモカ

安徽師範大学
日本語専攻4年
湯言薇

私のパソコンの壁紙は、岩井俊二監督の映画『花とアリス』のある場面だ。頭を上げて小躍りしている少女と、うつむいて道の端っこを歩く少女。パソコンを開くたびに、そのシーンが鮮やかに甦る。

昨年、中国に派遣された日本人エンジニアの戸邊さんに中国語を教えることになった。彼は父と同じ年だが、とても朗らかな性格で、時を経ずして忘年の友になった。ある日のこと、私は戸邊さんから「モモカも中国語勉強してるから、彼女にも少し教えてくれないか」と頼まれた。モモカとは戸邊さんのお嬢さんで、日本の大学に通っているという。私は戸邊さんの依頼を快く引き受けた。とはいえ、同年代の日本人とチャットするのは初めてなので、何から話せばいいかわからない。とりあえず、「初めまして。薔薇です。お母さんが『ベルサイユの薔薇』が好きで、そんな名前をつけました。あなたはモモカさんですね。中国人は桃の花が好きなんですよ」というメッセージを送ってみた。「ふーん、そうですね」。彼女の返信はとても素っ気なかった。内気な子なのかな。それとも、あまり気が進まないのかな。何はともあれ、私のできることをするしかない。

ある日のこと、モモカは私に「お疲れさまって中国語でどう言うの?」「じゃあ、頑張ってくださいはい?」と聞いてきた。私は、コロナの影響もあって戸邊さんが5年近く帰国していないのを思い出して、「お父さんに会いたいでしょ」と尋ねてみた。するとモモカは「別に。パパは毎日充実してるって言ってたし…」と答えた。その時、私の脳裏を突

然、『花とアリス』の一場面がよぎった。無口で内気なアリスが、中国で働く父への愛を素直に言えなくて、別れ際によく中国語で「パパ、愛してる」と告げるシーンだ。ああ、そうか。きっとモモカも同じなんだ。私は歳の大して変わらない日本の妹を、限りなく愛おしいと思った。

それから徐々に、私とモモカの距離は縮まっていった。私たちは互いの日常をシェアし、世間話を楽しむ。SNSでモモカの記録した風景を目にした私は、彼女と手をつないで日本のあちこちを回っている自分を想像した。そして先日、モモカは「交換生プログラムに申し込んだから、来年は中国に留学できるかも」と、嬉しそうな絵文字を添えて送ってきた。「そしたら、お父さんと薔薇ちゃんに会えるね！ちょっと不安だけど、怖くはないよ。もう中国人の友達がいるんだから」。私はそれを読んで、目頭が熱くなった。待ってくれよモモカちゃん、薔薇も頑張るから。いつか、あなたの語ってくれた日本を、あなたと一緒に確かめたい。

中国の明るい薔薇は情熱的に香り、日本の繊細な桃花ははにかみながら微笑んでいる。この世界は、無限のガーデンだ。育った土壌が違うからこそ、私たちは互いの色を、匂いを、そして周りの風景を感じることができる。咲き誇れ、モモカ。咲き誇れ、私。国境を越えて、一緒に美しい花を咲かせよう。

(映画『花とアリス』)

銃に対抗する花

電子科技大学
日本語専攻3年
孫佳明

「私たちは、傷つけたり傷つけられたりしているうちに、だんだん優しくなってきたと思います」このエピソードを見るたびに、私は涙を禁じ得ない。

戦争が終わったヨーロッパを背景にしたライトノベルの『ヴァイオレット・エヴァーガーデン』は、2018年に株式会社京都アニメーションよりアニメ化された。初めて見た時に、西洋の設定でカタカナの多さに違和感があったが、ストーリーが進むにつれて、その中には日本の古典的な悲劇の美学が含まれることに気がついた。

かつて戦争機械として存在していた冷たい少女は、手紙を代筆する仕事をしているうちに、愛の意味を理解していき、笑いと涙を持つようになってきた。主人公ヴァイオレットは他人の感情を伝えるのを助けると同時に、自分が優しくて善良になり始め、自分がなぜ

生きるべきかを知り、命令を実行するだけの機械ではなくなった。

魯迅は「悲劇は価値のあるものを破壊することだ」と言った。平和は美しいが、戦争で肉親を失った人々は、なかなか普通の生活に戻れなくなる。命をかけて救ってくれた少佐が行方不明になり、ヴァイオレットは一人で残酷な戦争から生還し、義肢を装着してタイピングを学ぶために専門学校に通い、少佐への思いを胸に信書サービスを提供する会社で働いている。本来、成長とは美しいものだが、彼女の場合は悲劇なのではないだろうか。彼女はただ普通の生活に戻っただけなのだ。

しかし、一時的な平和でさえ、人間の輝きを示すのに十分だ。人々は未来への希望を持ち、勇敢に生活し、互いに支え合って励まし合い、世界の困難に直面し、自分の幸せを追求している。このアニメは戦争の残酷さと人々の暖かさの対比を通して、平和の美しさをはっきりと表現している。

私は、ヴァイオレットから多くの啓示を得た。例えば、離別の中にも美しさがあり、失ったものはより懐かしいものだ。中学生の時、私はよく転校していて、友達ができてからすぐ別れなければならなかったのも、しばしば過去の悲しみに陥った。その後、他人との出会いが限られていることを徐々に受け入れ、代わりに現在の友情をより大切にし、過去の事に対して悲観的な感情を持たずに、思い出に残すことをした。

アニメ『ヴァイオレット・エヴァーガーデン』を通じ、現在の生活を大切にして、希望を持って生きていくことが、苦難に対処する正解だということが分かった。この生き方は、銃に対抗する花だ。

なお、このアニメの外伝が完成したのは、7・18 京都放火事件が起きる前日のことだった。不幸中の幸いは、『外伝』を保管しているコンピューターサーバーが完璧で、映画も予定通りに公開されたことだ。製作したアニメと同じように優しい京アニは、この『外伝』のエンディングで火災事件での犠牲者や負傷者など、参加スタッフ全員の名前を公開し、この作品で彼らの献身を記念した。これは銃に花を咲かせる方法だと思う。

(暁 佳奈——『ヴァイオレット・エヴァーガーデン』)

思い出は本物か偽物か

長安大学外国語学院
日本語専攻3年
夏艶卿

「石黒の小説は、その巨大な感情の力で、私たちが世界とつながっている幻覚の下に隠された深淵を発掘した。」これは、ノーベル文学賞受賞時の挨拶だ。読者には、漠然とした印象、淡い感じが残し、本全体も完結したストーリーではなく、無数の空白を残すことで読者自身の想像を掻き立て、その深い意味を体得させようとしている。

英国に移住した未亡人によって、故郷の長崎や故人への思いを中心に物語全体が展開されている。舞台は戦後の長崎。著者は戦争の恐ろしさを意図的に薄め、戦争に苦しめられた母娘が望んだ安定と新たな生活、戦乱がもたらした影と心の闇から抜け出せない様子を重点的に描いている。

思い出は、この作品の最も重要なテーマだ。主人公悦子の思い出は、矛盾と空白に満ちており、私は批判的な目で2回読むことで、歪んだ物語を自分なりに読み解いていった。例えば、物語の始まりの部分である娘景子の自殺である。なぜ自殺したのかは説明されておらず、自分の話を友人の話に置き換えることで、彼女自身の罪悪感を減らすよう導いている。

石黒一雄は「思い出が好きなのは、思い出は私たちが自分の生活を見つめるフィルターだからです。思い出が曖昧で、自分を騙す機会を与えてくれました。作家として、実際に何が起きているかではなく、何が起きているのかを教えてくれることに関心があります。」と語っている。彼が関心を持っているのは、外の現実の世界ではなく、人間の複雑な心の世界なのだ。歪んだ思い出を通じて反応する微妙な感情の変化は、人々がこの世界をよりよく覗くのに役立つのだ。

物語の最後では、悦子と友人佐知子は同一人物で、娘景子は友人の娘万里子であることを示唆している。はじめからそうだと疑っていたが、確かな足跡は残していなかった。だが、物語の最後になると、

「あの日、景子は喜んでいて。私たちはケーブルカーに乗った」

ともらし、悦子自身が丹念に設計した嘘を一言で突き破っている。

思い出は、過去のつらい経験を変え、それによって自分を満足させる生活を構築することができる。本の中で描かれているように、戦争の傷は悦子に過去の人生を架空のものにし、思い出の中では優しく良い母親を創り出していたのだ。

石黒一雄はこのような描写により、自分を欺くこと、後ろめたいことを表現し、人の心の複雑さと人の生活に対する思いを伝えようとしていた。従って、石黒一雄の淡々とした穏やかに見える文面にも、実は深い意味が込められているということがこの作品から分かった。

『遠い山なみの光』